



▲ホテルのウエイトレス（サルバドル市にて）

た。その他、お招きのたびに、年中行事の様子をうかがい、きまったケーキ、かざりつけなども見せて頂く事が出来ました。子供を大切に、家族仲のよい人々に出合うことが出来て幸せでした。

7. 名わき役に徹するおいも

広く、人口の少ない南アメリカの国々では牧畜が発達しておりますので、肉類は日本人から見ますとうらやましいほど豊富でした。肉はそもそものが副食でありながら、また一面欠かさず食卓に上る主食の位置にあるといえ

ましょう。そして肉を食べる時は、必ずといって良い程おいもがそえられます。それはあまり手をかけずに素朴な形で用いられ、牛と共に牧場の片すみで育成されたジャガイモの天命とも云うべき姿と思われます。ジャガイモを生かされた食卓に出合う度に何となくうれしく、ほっとした気持ちがいたしました。

訪れた場所が限られており、彼の国の生活のごく一端をうかがっただけでしたが、おいもが食生活の中に深くしみこみ、派手ではないにしても、これなくしては暮らしが成り立たず、まさにおしもおされぬ料理の名わき役の位置を、ゆるぎないものに行っていることを知りました。場所の関係で、サツマイモの消費につきましては十分に知るチャンスがありませんでしたが、青果物店でなつかしいサツマイモを見かけますとつい求めたくなり、私の家では大いに利用させていただきました。さつまいもの甘煮は黄金色に美しく柔らかく、天プラは日本の味でした。ブラジル産のふじりんごとレモン汁を入れ、サツマイモとの重ね煮はパンにもよく合っておいしいものでした。ブラジリア近郊でとれた栗が手に入りま

〈いも・つれづれ草〉

◎ アンネの日記 ◎

ジャガイモという単語が一番多く出てくる小説は、もちろん私の知っている範囲の話ですが、『アンネの日記』です。第2時大戦末期にオランダから逃げたユダヤ人家族の隠れ家での生活記録とも言える日記ですが、料理名ポテト・シャレイを含めジャガイモは45回ほど出てきます。

回数の多さのほか、家族みんなで皮を剥くとか、それを各自がフライにするとか出てきますので、かなり食べていたことが判ります。主食のライムギパンは無くても我慢する、ジャガイモさえ食べれば文句は言わない、と書いていたほどの実質の主食なのに、ノルマンディ上陸作戦の前日には欠乏してきたことが書かれていま

す。樽に入れて保存し、秘密警察、泥棒、ネズミ、ネコの小便、疫病などの腐敗から守って頑張ったようです。これを読むと、今の日本の飽食状態を反省し、列島が南北に長く年中いつでも美味しいものが出回ることの有難さに感謝しなくなってきました。

では、ポテトチップと言う単語の多く出てくる小説はと言えば、笹川ひろし作・絵の『ポテト姫は捕り物がお好き』が横綱でしょうか。17回ほど出てきます。

小学6年生香月久美・明子のふたごがポテトチップのシールで当たった家族旅行で事件にまきこまれるという子供向けの探偵小説（ポプラ社文庫）です。（浅間和夫）